

弱者を助ける勇気と心意気！
我が人生は子供たちとの交流にあり！



にんげん
ひとすじ

人

間

一

筋

一途な人間模様

障害者支援施設

放課後等デイサービス「ほっぷ」

佐藤

工さん

(61)

理事長

『地域交流から生まれた支援施設！』

家族と職員、地域みんながほっぷ家族！』



佐藤理事長（右側）とほっぷ職員の皆さん



▲佐藤 工理事長



▲施設内には二つの部屋がある



▲ボランティアと描いたデザイン



▲緑あふれる環境の中に施設はある

高齢化社会を迎えた日本国内は相反する少子化対策と共に福祉は社会問題化しています。しかし高齢化問題に対する国の対策は比重が多い分、税負担も大きいがある程度の手厚い制度も行き届いて来ましたが、しかし、高齢化と同様、社会の支援がなければ正常な社会生活が送れない人達もいる事を私たちは改めて認識しなければなりません。

自宅の庭先を利用して障害者の受け入れ施設を設立した放課後等デイサービス「ほっぷ」(特定非営利法人セミナー)の理事長・佐藤工(たくみ)さんを取材しました。

国道四十五号線を志津川方面に走ると「ほっぷ」があります。こじんまりとした施設だが利用する障害者やその家族から絶大な信頼があるこの施設は二年前に開所して以来、心温まる職員、協力してくれる地域の人達や施設の運営を支えてくれる外部団体が強力にサポートしています。理事長を務める佐藤工さんは昭和二十九年生まれ、津谷高校(現・響高校)を卒業、三年間、東京にある専門学校で学び、地元病院に就職しました。この頃から地元バレエチーム「津谷エンジェルズ」の監督をするようになり、当時、弱かった地元チームを強くして子供たちと勝利の感動を分かち合いたいと言う熱い思いからバレエの指導を引き受ける事に。いつしか子供達とのふれあいが生きが

いとなり、二十七歳の時に五年間勤めた病院を辞めてしまいましたが、時間が自由になる自家栽培の農作物を販売する八百屋に転身、子供たちとのバレエポールに打ち込みました。監督五年目、お陰で貧弱だった「津谷エンジェルズ」はついに全国ベスト8にまで勝ち進むチームに育て上げる事が出来ました。

その後、バレエ強豪校で知られる古川商業バレエ部のスカウトマンとして日本女子バレエで国際的にも活躍した菅山かおる選手を始め、多くの有名選手の輩出、指導に務めて来ました。こうした面倒見の良い佐藤さんは推薦を受け、十一年前から民生児童委員を務めています。二〇一一年に発生した東日本大震災後、障害を持つ子供達が震災によるストレスから親に暴力で発散するようになっていたのです。そんな障害者を持つ親から相談が多くなっていました。

行政による福祉活動政策を重視していた本吉町は合併によって福祉が大幅に立ち遅れてしまっている、将来への危機感も薄い地域性にも危惧していると言います。その中でも何かと高齢者問題だけが取り上げられ、障害福祉が疎かになっている事を佐藤さんは真剣に考えるべきと訴えます。様々な障害を持った子供達が震災で受けた精神的負担は大きく、自分の意志を強く伝えられない子供が暴力行為にまで発展、家族崩壊寸前の相談を目的の当たり

にした佐藤さんは障害者やその家族を守らなければならない、誰が守ってやるんだと一念発起、これが施設開所へのキッカケになりました。震災後は場所も中々見つからず、取り敢えず自宅庭先にプレハブを置き、そこからスタートする事になりました。

プレハブを通して子供達と接して来た佐藤さんは持ち前の行動力から早速、施設建設を目指しました。震災支援の寄付やボランティア活動をすることで多くの人達からの応援でこの施設を開所したのが二年前、福祉経験のない素人によるスタートとあって様々な技術を持つ職業や経験者が集まってくれ、使用しているプレハブやその設備に掛かった一千二百万円の費用も全て寄付によるものでした。このような応援がなければ開所する事は出来なかったと振り返ります。

亡き母から「好きなバレエポールで人生を過ごして来たのだから今度は地域に貢献すべき」と、民生児童委員を引き受けた事で住民たちの悩み相談から始まった施設建設計画はようやく障害を持つ子供達を受け入れるようになりました。どんな障害者でも温かい笑顔と心の温もりで対応して行く事を念頭に現在、非常勤を含む、九名の職員がお世話にあたっています。佐藤さんはある夢を描いて来ました。その夢が来年秋にも実現する事が決まりました。支援者や二十名からなる外部団体の

協力で広い敷地と広い施設で障害者たちが伸び伸び過ごせる土地が見つかったのです。敷地千二百坪を三つに区切り、片側三百坪に施設を建設、中央には地元住民たちも集う事が出来る広い公園を造り、残る片側三百坪には成人した障害者たちが海産物やカット野菜等を出荷できるような安心して働ける就労施設の立ち上げを計画をしています。開所から二年間で学んで来た事を活かせる施設創りを目指したいと佐藤理事長は考えています。

人とのふれあいを大切にしている佐藤さんはこの施設を「ほっぷ」と名付けました。来年完成予定の新しい施設の名称はまだ決まっていますが「ステップ」の段階まで来たと感じています。そして残る「ジャンプ」はこうした障害者の未来に託したいと佐藤理事長は語ります。

関東の障害施設運営者を始め、税理士や社会保険労務士等、二十名の外部理事を入れ、働きやすい安定した雇用や健全な施設運営も取り入れていきます。細々と始まったこの施設だが障害者福祉に掛ける思いは一倍ある事が自慢だと言う佐藤理事長は現在、市による独自支援を求める協議会を立ち上げています。こうした持ち前のバイタリテイと人懐こい笑顔で人生現役でがんばりたいと言います。ホップ、ステップ、ジャンプ、がんばれば障害を持つ子供達とその家族。きっと未来は拓ける。